

文字の海に 飛び込みたい。

西の魔女が死んだ。四時間目の理科の授業が始まるつとして、いまは事務のおねえさんに呼ばれ、すぐお母さんが迎えに来るから、帰る準備をして校門のところで待っているように言われた。何かが起こったのだ。

— 梨木 香歩「西の魔女が死んだ」

「私は、慶の民の誰もに王になってもうたいたい。地位でもって礼を強要し、他者を踏みこむことに慣れた者の末路は、昇龍、呀峰の例を見るまでもなく明らかだろう。」

そしてまた、踏みこまれることを受け入れた人々がたどる道も。人は誰の奴隷でもない。そんなことのために生まれるのじゃない。

他者に虐げられても屈することない心、災厄に襲われても挫けることのない心、不正があれば正すことを恐れず、ケダモノに媚びず。私は慶の民に、そんな不羈の民になってほしい。

己という領土を治める唯一無二の君主に。そのためにも、他者の前で毅然と頭を上げることから始めてほしい。

諸君は私に、慶をどこへ導くのだと聞いた。これで答えになるだろうか。その証として、伏礼を廃す。これをもって初勅とする——

— 小野不由美「十二国記」

人は獣は、この世に満ちるあらゆる生き物。他の生き物を信じることができない心のどこかに、ほかなる生き物に対する恐怖を抱えている。

— 土橋采穂子「獣の奏者」

その時私を受けた第一の感じは、くから突然恋の告白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策つたと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らししました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

— 夏目漱石「こころ」

「カムパネルラ、また僕たち二人大きくなったねえ、どこまでもどこまでも一緒にいる。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸いのためならば僕の中からだんかぱんくもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどほんとうのさいわいは一体何だろう。」シヨパン「が云いました。」

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

— 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」

小さい頃から本が好きだった。
中学生で人生の道標となる本と出会った。
高校生の時初めて自分で本を買った。
初任給で買ったのは本屋大賞で話題になった本だった。

イザは玉兎も、その兎につきまとう官能的な印象も好きだった。僕たちの復活祭の兎と同様、それは豊穡と愛の象徴だった。

— チェンティクローリア公爵「僕は美しいひとを食べた」

